

英語でやり取りをする意欲を高める授業づくり

— 英語で「話すこと」、「聞くこと」に積極的に取り組むことを目指した言語活動の工夫 —

松嶋幸太¹

新高等学校学習指導要領では、英語の「話すこと」の目標及び内容において、[やり取り]と[発表]の二つの領域が示された。本研究では、英語でやり取りをする意欲を高めることを目的とし、相手に伝える内容を生徒自身が選択し、その内容について収集した情報を基に会話練習を繰り返した。その結果、生徒は関心を持って積極的に活動に取り組み、英語でやり取りをする意欲を高めることができた。

はじめに

グローバル化が進展する中で、現在の高校生を取り巻く環境は、劇的に変化している。外国人雇用の拡大や、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催など、身近な場面での外国語によるコミュニケーション能力を必要とする機会が増えていくことが予想される。

現行の学習指導要領は「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に育成することをねらいとして改定され、様々な取組を通じて充実が図られてきた。

しかし、平成28年12月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」という)は、現行学習指導要領における外国語教育の課題を「中・高等学校においては、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれた授業が行われ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が十分に行われていない」(中央教育審議会 2016 p. 193)と指摘している。

また、文部科学省の「平成29年度英語力調査結果(高校3年生)の概要」では、高校3年生の英語力の傾向として、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能がバランスよく育成されていないことと、特に「話すこと」「書くこと」の数値は全体的に低いことが指摘されており、今後これらの課題解決のための更なる授業改善が求められる。

平成30年3月に告示された新高等学校学習指導要領の第8節 外国語においては、「話すこと」の目標について、[やり取り]と[発表]の二つの領域を示し、他の三つの領域と併せてコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが示された。

本研究では、この中の「話すこと[やり取り]」の能力の育成に着目し、能力の素地となる意欲をより高めるために言語活動の工夫を行った。

研究の目的

本研究では、相手に伝える内容を生徒自身が選択し、その内容について調べた情報を基に会話練習を繰り返して行うことを実践する。その結果を検証することで、生徒の英語でやり取りをする意欲を高める授業改善に資することを目的とする。

研究の内容

1 英語でやり取りをする意欲

新高等学校学習指導要領の第8節 外国語で示されている英語コミュニケーションⅠの「話すこと[やり取り]」の目標は次のとおりである(※下線は筆者)。

ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。

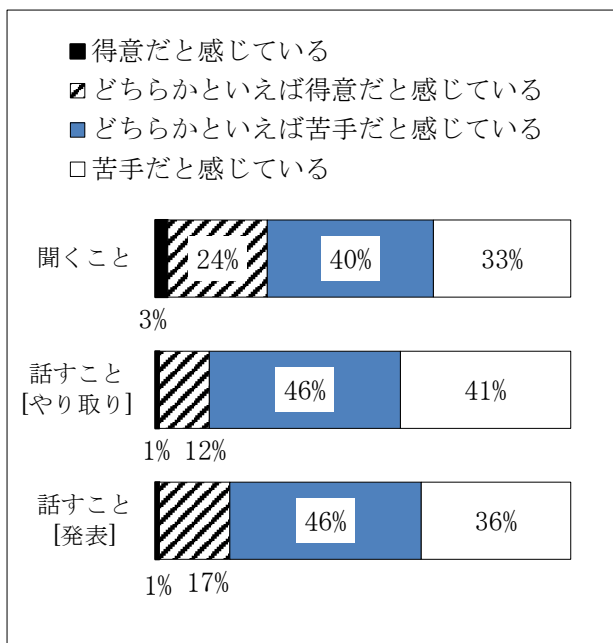
イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。

これらの目標を踏まえ、本研究における英語でやり取りをする意欲を、「英語を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることに興味を持ち、積極的に行おうとする姿勢」と定義する。

2 生徒の英語学習に対する意識

所属校1学年3学級(合計75名)に対して英語の学習「話すこと」に対して次の結果が得られた(第1図)。

1 神奈川県立愛川高等学校
研究分野(授業改善推進研究 外国語(英語))



第1図 「聞くこと」「話すこと」への意識

この結果から、多くの生徒がこれらの技能に苦手意識を持っていること、特に「話すこと[やり取り]」については87%の生徒が苦手意識を持っており、他よりも多いことが分かる。

3 「話すこと[やり取り]」の言語活動の設定

「答申」は、言語活動について、「児童生徒が興味を持って取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて児童生徒の『主体的な学習に取り組む態度』の高まりを目指した指導をすることが大切である」（中央教育審議会 2016 p. 195）と述べていることから、本研究においては、次の二つの視点からやり取りの言語活動を設定した。

(1) 生徒の興味を高める工夫

生徒の興味を高める工夫をすることが、生徒の学習に対する積極性につながると考えた。そこで、単元の学習活動の中に、生徒一人ひとりが題材を選び、それについての情報を自分で収集する場面を設定した。

(2) 言語活動を行う際の支援

言語活動を行う際には、習得させたい技能に応じた支援が必要だと考えられる。教師が適切な支援をすることで、生徒が英語でのやり取りに対して苦手意識を克服し、自信を付けることができ、その結果、英語でやり取りをする意欲が高まると考えた。

4 研究の仮説

本研究における仮説は次のとおりである。

学習活動の中で、相手に伝える内容を生徒自身が選択し、その内容について収集した情報を基に会話練習を繰り返し自信を付けることで、英語でやり取りをする意欲が高まる。

5 授業の構想

(1) 生徒の興味を高める工夫について

ア 行きたい国の選択

今回の授業において教科書で扱う内容が世界遺産であることから、互いの行きたい国についてペアで質問し合うことを会話練習の内容とした。生徒は授業の中で紹介する六つの世界遺産の写真を見て、行きたい国を選択した。

イ 行きたい国についての情報収集

生徒は、自分の選んだ世界遺産のある国についての情報をインターネットで収集した。生徒が、自身で収集した情報がそのまま会話練習で活用できるように、五つの項目についての英語での質問を、事前にワークシートで示した。生徒は自身が選んだ国の「①食べ物」「②観光地」「③スポーツ」「④旅行時間」「⑤世界遺産」についてインターネットで調べ、答えを英語で記入した。第2図がワークシートの抜粋である。

Lesson 7 Machu Picchu

① What is a popular food there?
()

② What is a popular tourist spot there?
()

③ What is a popular sport there?
()

④ How many hours does it take from Japan?
()

⑤ What is a world heritage site there?
()

第2図 会話練習の基となるワークシートの抜粋

(2) 言語活動を行う際の支援について

高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編では、やり取りの言語活動を行う際の支援が例示されている。その中から、本研究では次のア～ウの支援を行った。

ア モデルとなるやり取りを見せる

生徒が学習に対して十分に見通しを持てるように、単元の目標となる会話の流れを設定した。生徒が練習を始める前に、教師同士のやり取り及び教師と生徒のやり取りを示した。

イ 会話の展開を示す

英語でのやり取りに対して苦手意識を持つ生徒が取り組めるように、段階的に会話練習を行った。生徒は、最初は会話の流れを示すワークシートを見ながらペアで会話をし、最後はワークシートを見ずに会話をした。

練習の際に使用した会話の流れを示すワークシートは次のとおりである(第3図)。

A: What country do you want to go to?
 B: I want to go to _____.
 A: (質問)
 B: (答え) What country do you want to go to?
 A: I want to go to _____.
 B: (質問)
 A: (答え)
 B: Well, nice talking with you.
 A: You, too.

第3図 会話の流れを示すワークシート

また、会話を継続するための方法として、相手の発言を繰り返すことと英語特有のつなぎ言葉(Well.../You know...等)及び、気持ちを伝え合う表現(Oh!/Sounds good. 等)を学習活動の中で練習した。

ウ やり取りを繰り返す

生徒は英語でのやり取りに慣れるために、1回の練習が終わるごとにペアを変え、生徒同士で複数回やり取りを行い、教師とのやり取りも行った。併せて、活動で取り組んだことを更なる自信につなげることができるよう、練習が終わるごとに、学習の成果を確認する振り返りの場面を設定した。

6 検証授業

(1) 検証授業の概要

【実施期間】平成30年10月22日(月)～11月7日(水)

【対象生徒】愛川高等学校1学年3学級(82名)

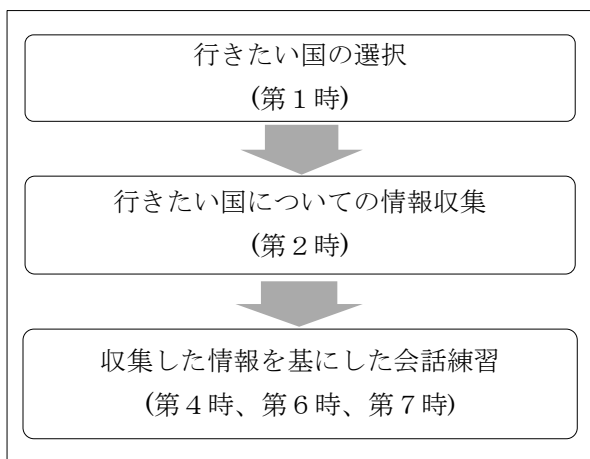
【科目名】コミュニケーション英語 I

【単元目標】収集した情報を基に互いの行きたい国について会話ができるようにする。

【時間数】各学級7時間

(2) 学習活動の流れ

単元の学習のうち、会話練習に関わる学習活動の流れを以下に示す。



第4図 会話練習に関わる学習活動の流れ

(3) 各時間の学習活動

検証授業全7時間のうち、会話練習に関わる授業での各時間の学習活動を以下に示す。

ア 第1時

生徒が学習に見通しを持てるように、会話練習の内容と単元の目標を生徒に伝えた。生徒は、世界遺産について書かれた英文を読んだ後に、六つの世界遺産の写真の中から、自分の行きたい国を選択した。それからペアを組み、互いの行きたい国について聞き合う活動をした。

イ 第2時

生徒は、第1時で選択した国についての情報をインターネットで収集し、会話練習で使う五つの疑問文の答えを英語でワークシートに書き込んだ。

ウ 第4時

生徒は第2時で調べた情報を基に会話練習をした。会話練習をする前には、モデルとして教師と生徒のやり取り、生徒同士のやり取りを示した。会話で使用する五つの疑問文を音読した後にペアを組み、それぞれが調べたことについて、英語で質問し合う活動をした。次に、会話の流れを示すワークシートを使いながら、会話練習を行った。生徒は、会話に慣れるために、1回の練習が終わるごとに相手を変えて、練習を繰り返した。

エ 第6時

他者からの評価を受け自信を付けたり、他者を評価して自分の学びを振り返る機会を持ったりすることを目的として、4人でグループを作り、1組のペアの会話をもう1組のペアが評価をする場面を設定して、会話練習を行った。

オ 第7時

生徒はまず個人で、相手に聞きたい質問と質問に対する答え方を練習し、その後、生徒同士の会話、教師との会話を行い、やり取りの言語活動のまとめとした。

7 検証方法

検証授業の内容について、①生徒の英語でやり取りをする意欲を高めることができたか、②指導の工夫の有効性についての2点について次の三つの方法で検証した。

(1) 英語学習に関するアンケートへの回答の分析

検証授業前と検証授業終了後に、同一項目でアンケートを実施し、英語でやり取りをする意欲と英語学習に対する意識の変化を考察した。

(2) 検証授業後の振り返りの記述の分析

生徒が検証授業後に書いた振り返りの記述から、英語でやり取りをする意欲と指導の工夫の有効性について考察した。

(3) 会話練習の効果に関するアンケートの回答の分析

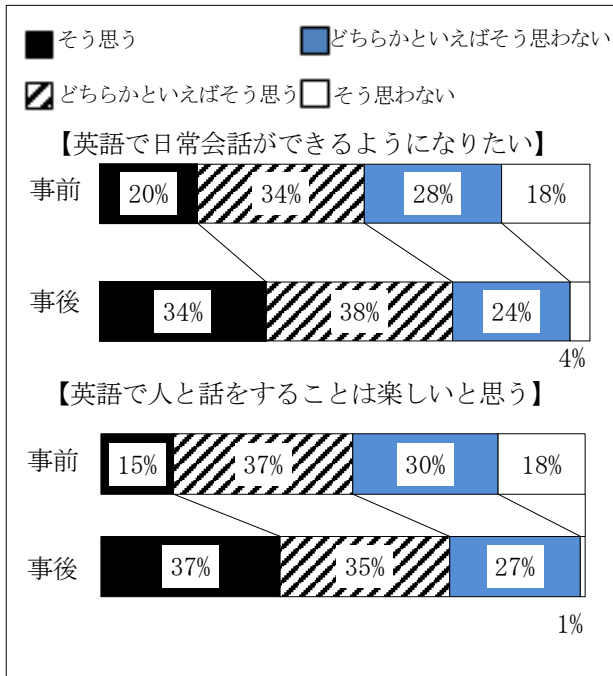
検証授業後のアンケートにより、授業での会話練習

の英語でやり取りをする意欲を高めることへの有効性を検証した。

8 結果と考察

(1) 英語でやり取りをする意欲の変化

ア アンケート（4件法）による調査結果



第5図 英語でやり取りをする意欲

検証授業前後のアンケート（4件法）による調査によれば、「英語で日常会話ができるようになりたい」という質問項目に対して、肯定的に回答した生徒の割合が、54%から72%に上昇し、「英語で人と話すことは楽しいと思う」という質問項目に対しては52%から72%に増加した(第5図)。この2項目の回答について検定(Wilcoxonの符号付順位検定)したところ、いずれも有意な向上が認められた($p = 0.00 < 0.05$)。この結果から、全体の傾向として、今回の学習活動は生徒の英語でやり取りをする意欲を高めることができたといえる。

イ 振り返りの記述について

検証授業後の生徒の振り返りから、英語でやり取りをする意欲が高まったことが読み取れる記述を次に示す(※下線は筆者)。

生徒Aの記述

受け答えする時のOh!やI see.などが会話をする上でとても大切だと思った。今後も少しでも会話がスムーズにできるようにしたい。

生徒Bの記述

「英語で話してみたい」という気持ちがでてきた。先生と英語で話す時は、言葉につまってしまったけど、「嫌」という気持ちにはならず、楽しい気持ちになってうれしかったです。

生徒Cの記述

いざやってみるとすごく簡単に思えたし、もっと自分で考えて外国人と直接英語でスラスラ話せるといいなと思った。

生徒Aは、やり取りをする際に英語を用いて反応をすることが大切であることを理解し、できるようになりたいという、英語の学習に対する積極的な姿勢を持ったことが分かる。生徒Bは、活動を通して苦手意識を克服し、英語でやり取りをする意欲が高まったといえる。生徒Cは、「自分で考えて」という記述をしており、英語で自分の意見や考えなどを伝えられるようになりたいという気持ちを持ったことが分かる。

以上のアンケートの質問事項に対する回答、及び、振り返りの記述から、生徒の英語でやり取りをする意欲が高まったと考えられる。

(2) 検証授業での指導の工夫の有効性

ア 生徒の興味を高める工夫の有効性

検証授業後の生徒の振り返りの記述から、自分で国を選択し、調べたことに関して記述をしているものを以下に示す(※下線は筆者)。

生徒Dの記述

自分で調べると、覚えようとするから楽しかった。

生徒Eの記述

今度は別の国でもやってみたいと思った。

生徒Dは、自分で調べたことが活動に対する前向きな取組につながったことが考えられる。この記述からは、生徒自身の意見や体験を英語で話す場面を設定することが、生徒の学習に対する積極性を引き出すことに有効であったことが読み取れる。また生徒Eは学習活動を通じて、外国への更なる興味が高まったことが分かる。これらの生徒の記述から、検証授業で行った、生徒が行きたい国を選び、その国についての情報を収集するという工夫が、生徒の学習活動に対する興味を高め、学習に対する積極性を引き出したと考える。

イ 言語活動を行う際の支援の有効性

生徒Fの記述

最初は難しそうだと思ってやる気がおきなかったけど、途中から、これなら自分でも理解できているし、聞けて、話せていることに気付いて楽しくなった。

これぐらいの量なら簡単に覚えられて英語が苦手な人でもできる。自信をもって積極的に話すことができた。

生徒Gの記述

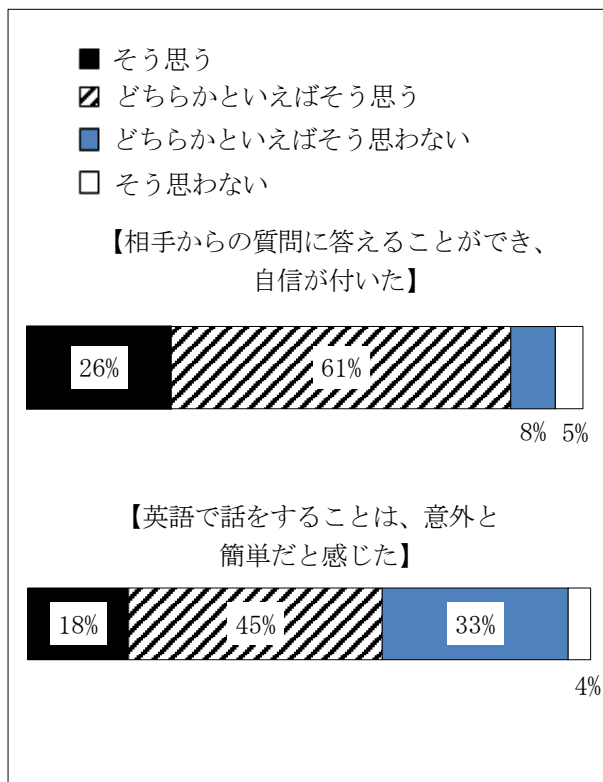
何回も同じことを繰り返したから、だんだん自信がついた。

生徒Fの記述からは、徐々に英語でのやり取りに対する苦手意識を克服し、自信が付き、やり取りの言語活動に積極的に取り組めたことが読み取れる。したがって、段階的に行ったやり取りの言語活動の設定が適

切であったといえる。また、生徒Fの「途中から」という記述や生徒Gの記述からは、練習を繰り返したことで段階的に自信を付けていったことが読み取れ、今回行った会話練習が、英語に対して苦手意識を持つ生徒が自信を付けるために効果的だったといえる。

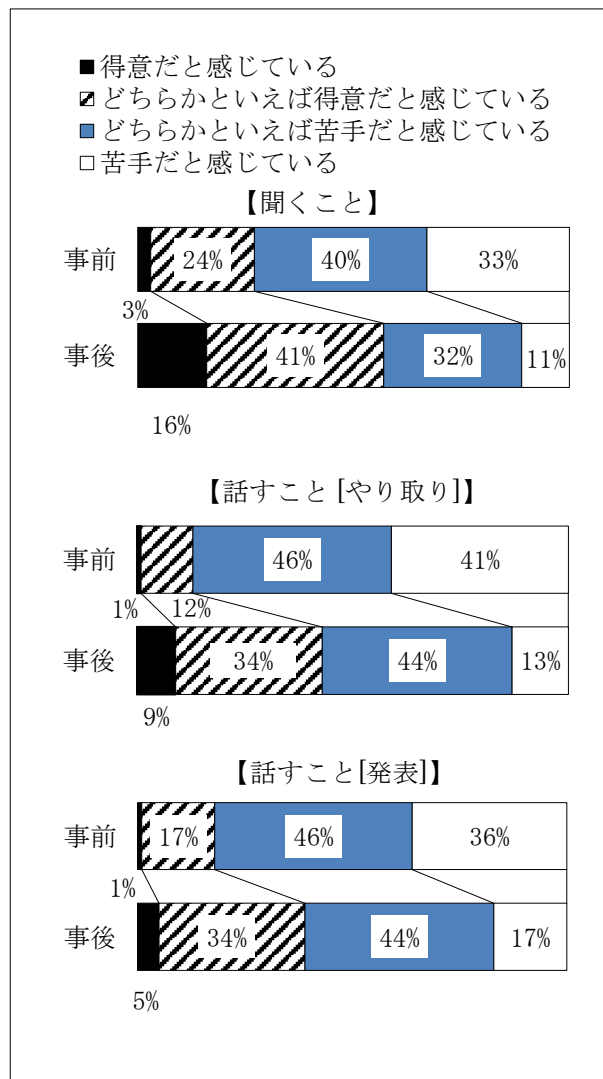
生徒Hの記述
相手の言うことに英語で反応できて、相手の言うことを繰り返すことができるようになって会話が自然になったと思う。

生徒Hの振り返りには、会話を継続するための表現に関する記述があった。この記述からは、やり取りの言語活動の際に、会話を継続するための表現や気持ちを伝え合う表現などを意識的に使わせながら会話練習を行ったことで、生徒に英語を用いて人と自然に話げできたという実感を持たせ、自信を付けたことを読み取ることができる。



第6図 会話練習の効果に関する質問

会話練習の効果を検証するために、検証授業後に会話練習に関するアンケートを実施した。「相手からの質問に答えることができ、自信が付いた」という質問に対し、多くの生徒が肯定的に回答をしていることから、会話練習を通し、多くの生徒が自信を付けることができたと考える。「英語で話をするのは、意外と簡単だと感じた」という質問に対しても、多くの生徒が肯定的に答えている(第6図)。これらのことから、今回の会話練習が、苦手意識を持っている生徒の実態に即した適切なものであり、生徒の英語でのやり取りに対する苦手意識を克服することに有効だったことが分かる。



第7図 「聞くこと」「話すこと」への意識

検証授業の前後に、英語を「聞くこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」に対する意識の変化について調査したところ、全ての項目において、「得意だと感じている」、「どちらかといえば得意だと感じている」と回答した生徒の割合が増加した(第7図)。この3つの回答について検定を実施したところ、いずれも事前と事後で有意な差が認められた($p = 0.00 < 0.05$)。学習活動を通して、生徒が「聞くこと」と「話すこと」に対する苦手意識を克服し、自信を付けていったことが分かる。

アンケート結果及び生徒の振り返りの記述から、多くの生徒が活動を通して苦手意識を克服し、自信を付けることができたと確認できた。このことから、会話練習を繰り返して生徒が自信を付けたことが、英語でやり取りをする意欲を高めた要因だと考えられる。

また第7時では、全員の生徒がワークシートなしで、練習した表現を用いて、互いの行きたい国について会話をすることができた。このことから、生徒の実態に即した適切な支援をし、段階的に会話練習を行うことは、生徒自身の意見や考えを英語で表現する活動への有効な手立ての一つであると考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では英語でやり取りをする意欲の向上を目指し、相手に伝える内容を生徒が選択し、その内容について収集した情報を基に会話練習を繰り返した。その成果を以下に示す。

- (1) 生徒自身が行きたい国を選択し、情報を収集する場面を設定することにより、生徒の学習活動に対する興味が高まり、学習への積極性につながった。
- (2) 適切な支援のもとで、会話練習を繰り返し自信を付けたことにより、英語でやり取りをする意欲が更に高まった。

またこれらの成果に加え、検証授業後のアンケートから、多くの生徒が外国に興味を持ったということが分かった。アンケートでは、82%の生徒が調べた国について興味を持ったと回答し、「今回調べた国について行ってみたい」という記述も見られた。これは、生徒自身が関心のある国について調べたことによる結果だと考える。

グローバル化が進む社会を生きていくためには、外国語によるコミュニケーション能力が不可欠である。その力を身に付けるためには、学びを継続する姿勢が求められる。本研究で得ることができたこれらの成果は、学ぶ姿勢の育成のために有効なものだと考える。

2 研究の課題と今後の展望

(1) 課題

所属校では、英語でやり取りをする意欲を高める上での課題の一つは、多くの生徒が英語に対する苦手意識を持っているということであった。検証授業では、多くの生徒が英語で話をする事への自信を付けることができた一方で、苦手意識が解消できない生徒もいた。そのような生徒には、教材の工夫や授業中の反復練習などを通して、更に指導が必要であると考え。また授業後の振り返りには、「中学校の復習ばかりだった」という、会話練習が易し過ぎたことを示す記述があった。これらのことから、生徒の状況を観察しながら、生徒一人ひとりの実態に即した学習活動を行えるように工夫をしていくことが必要であると考え。

(2) 今後の展望

ア 生徒の実態に即した更なる支援の工夫

本研究では、英語でやり取りをする意欲を高めることを目指し、生徒が会話の題材を選び、その題材についての情報を収集する場面の設定と、自信を付けるための支援を行った。検証授業における工夫以外にも、学習活動に対する生徒の興味を高める工夫や、自信を付けさせる方法は多くあると考える。生徒の興味や実態に即した学習活動を今後も工夫をし、実践することが大切であると考え。

イ 外国語によるコミュニケーション能力の育成

検証授業では、英語に対し苦手意識を持つ生徒も活動に取り組めるように、会話で使用する表現を予め示して練習を行った。しかし、実際のコミュニケーションでは、その目的や場面、状況に応じて、考えや気持ちなどを適切に表現する力が必要である。今回「(授業で扱った表現を)覚えることができた」と思った生徒たちが、「英語で話せた」と思えるように、授業の中で、生徒が英語を用いて自身の考えや気持ちなどを表現できる場面を、継続的に設定していきたい。

おわりに

検証授業を通じて、英語でやり取りする意欲を高めることを目指し、その結果、会話ができるようになりたい、英語で話をするのが楽しいと思う生徒が増えたと言える。生徒たちがその気持ちを忘れず、学び続けることができれば、自ずと外国語によるコミュニケーション能力も高まると考える。

生徒たちが今後も英語学習に対して意欲を持ち続けることを切に願う。そのため、自身も今後更なる授業改善に取り組み、生徒が外国語によるコミュニケーション能力を更に高められるような授業を行いたい。

最後に、本研究を進めるに当たり多大な御協力を頂いた愛川高等学校の教職員の皆さんに深く感謝を申し上げ、結びとしたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2018年12月取得)
- 文部科学省 2018 「高等学校学習指導要領」 p. 217
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf (2019年1月取得)

参考文献

- 文部科学省 2018 「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_09.pdf (2019年1月取得)
- 文部科学省 2018 「平成29年度英語力調査結果(高校3年生)の概要」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf (2019年1月取得)